様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００６２５

研究課題名（和文）室町期以降の日本における四声観・アクセント観についての研究

研究課題名（英文）A study on the concepts of the four tones classes in Japan in the Muromachi period onwards.

研究代表者
上野　和昭（UENO, Kazuaki）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：１０１６８６４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　800,000円

研究成果の概要（和文）：　室町期以降、日本における四声観（アクセント観）は、鎌倉期以前のそれとは異なるものであったことが言われてきた。本研究は、四声認識の変遷を追い、そこにいかなる音調認識の継承や変容、あるいは展開があったかを明らかにしようとしたものである。仏教の声明には鎌倉期以来の伝統的認識を継承したものがあり、公家社会には、たとえば『名目鈔』所載の声点にうかがえるような、「平声」を下降調ととらえる新しい四声認識があった。江戸期の本居宣長は、このふたつの流れを継承しながら、当時の中国語（浙江音）にもとづく文雄の四声観を批判したようにみえる。これらのことは、現代的の一般的な音調観では捉えきれないものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　これまで、文献資料による日本語アクセント史研究は現代的な四声観（音調観）にもとづいて考察されることが多かった。しかし、かかる文献を著した人々には、それぞれの四声認識があったはずで、その認識にもとづいて文献が記されているのであるから、まずは彼らの拠って立つところを明らかにしたうえで、アクセント史も記述しなおされなければならない。とくに室町期以降の文献資料を、鎌倉期以前のそれと同じように扱ってはならない。このようなアクセント観の史的研究は、かつて前田富祺によってなされたことがあったが、本研究において、これをあらためて取りあげ、問いなおしたところに本研究の学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：It has been argued that after the Muromachi period in Japan, the notion of the four tone classes came to be different from those of the previous periods. The present study investigates the scholarly treatments of the four tones in the Muromachi and later periods and illustrates how the concepts on tones were inherited, developed, and transformed. The results show that Japanese Buddhist chant maintained the traditional notion of tones from the Kamakura period. By contrast, within the kuge aristocratic society, a new concept of the four tones emerged, where hyosyo (level tone) was characterized as a falling tone, as observed in the tone annotations in Myomokusyo. Later in the Edo period, Norinaga Moto’ori succeeded both strands of tone theory and criticized the tone concept by Mon’no; that was based on the Chinese pronunciation in the Zhejian province at that time. These shifts of conceptualization are beyond the scope of currently dominant views on tones.

研究分野：日本語学

キーワード：和字正濫鈔　和字大観鈔　漢字三音考　契沖　文雄　本居宣長　伊勢貞丈　石原正明

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）四声観、アクセント観について、それを中心的に研究したものとしては、古く小西甚一（1948）、金田一春彦（1951）、頼惟勤（1951）などの業績があり、さらには前田富祺「契沖のアクセント観」（1962）にはじまる一連の研究があった。たしかに古代のアクセント観は文字を単位とするものであり、江戸時代におよんでようやく語を単位とするアクセント観があらわれるが、古い資料にも訓読漢字に差された声点があり、さらに室町以降「平声」を低平調とばかりは捉えていないことが明らかにされていた。このようなことから、四声観、アクセント観の変遷を追う作業が必要であった。

（２）契沖の仮名遣書に述べられた四声観、アクセント観は、彼が、そのころ有力であった定家仮名遣をどう捉えていたかということ、また、契沖が伝統的な真言宗の音調観にもとづいて考えていたことなどを理解したうえで考えなければならないが、その根本的な問題についての研究は緒についたばかりであった。金田一（1974）によれば、本居宣長の四声観は契沖と同じであったとされている。そして、彼がアクセント単位を語のレベルで捉えようとしていたことは、前田（1967）によって明らかにされている。これに対して、文雄のアクセント表示については、いまだ研究の途上にあった。これらの継承と対立の経緯を追う作業も、本研究の開始当初においてはまだ本格的な研究が進んでいなかった。

２．研究の目的

（１）本研究は、室町期以降の四声観、アクセント観をめぐる学術的研究の経緯、すなわち学説相互の関係と展開過程をあきらかにすることを目的としている。これまでは、文字単位のアクセント観から、語単位のそれへの展開過程として説明されるだけであったが、そのような認識がどのようにして生まれ、はっきりと示されるにいたるのかを解明する。

（２）本研究はまた、これまでの学説に対する評価を検証することも目的とする。従来の研究では、それぞれの学説についての説明が簡略にすぎて、『漢字三音考』にしても『和字大観鈔』にしても、その表層的理解にとどまったことを遺憾とする。契沖は仏教的世界観にもとづく四声観、アクセント観にたち、また文雄は、すでに言われているように中国語（浙江音）の知見によって日本語アクセントを理解しようとしている。文献を読み込むことによって、それぞれの思想的背景を知ることも本研究において明らかにすべきことがらである。

３．研究の方法

本研究は文献資料を対象とするものである。したがって、文献をその内容によって分類し、それぞれの四声観、アクセント観についての記述を分析することにした。具体的には以下の４類に文献を分けて検討する。

（１）仏家に伝わる声明関係の資料（主として高野山に蔵される伝書）
（２）いわゆる「新式声点」の資料（主として『名目鈔』諸本）
（３）国学者、故実家などの残した資料（仮名遣書、語学書、故実書、随筆）
（４）芸能関係の伝書（能楽・平曲伝書）

４．研究成果

（１）仏家に伝わる声明関係の資料として論議書をとりあげ、そこに記された「出合」の問題点について検討した。とくに論議書所載の漢語アクセントにおける「師傳」のあり方を具体的に指摘して、その資料性を明らかにした。（以下アクセントの高拍を●、低拍を○であらわす）

和語には、南北朝時代（14 世紀）をはさんで
〔A〕○○●＞●○○　　のような変化があり、また同時期に
〔B〕○○＞●○、○○○＞●●○　のような変化もあったとされている。

これまでは、漢語アクセントにも和語と同様の変化があったと考え、論議書に〔B〕の変化が反映していないことの理由を説明しようとしてきた。たとえば、桜井茂治（1970・1994）は、漢語アクセントにも〔A〕〔B〕二つの変化があったと想定し、「出合」は〔A〕と〔B〕の中間段階のアクセントを反映していると解釈した。また金井英雄（1992）は、二種のアクセント変化に重要度の違いがあったとみて、〔B〕の重要度が低いために「出合」に反映していないのだと考えた。

しかし、本研究では、日常漢語とはいえない論議の漢語の唱え方は「師傳」にしたがうのであって、かならずしも和語の変化を反映するものではないことを論じ、○○型や○○○型などの漢語に「平ラニ」「直クニ」などと「師傳」があれば、それらの漢語はその「師傳」にしたがって唱えられたはずであること、そして、そのような発音が室町期においても自然な発音として可能であったことを明らかにした。

（２）いわゆる「新式声点」の資料としては『名目鈔』諸本が有名である。同書の伝本について、これまでにも長い研究史があり、これを整理して声点の淵源を明らかにすることが求められていた。

同書の著者自筆稿本（東山御文庫蔵）には声点がなく、字音語だけでなく和語にも声点が差されたものは後水尾院によるものが淵源であるとされてきた。これについて、諸伝本を調査したところ、後水尾院にさかのぼるもの以外にも、いくつかの声点本を指摘することができた。しかし、後水尾院周辺で同書の文字読みが行われていたことも明らかになった（小浜市立図書館酒井家文庫本）。また、その一方で尊海識語を載せる諸本にも声点がこまかに差されており、後水尾院のものとは別の系統のものであることが明らかである。

いずれの声点本も、声点の位置と、そのあらわす音調との関係については未整理のものであるが、なかに「新式声点」（平声点が次拍への下降調をあらわし、去声点が次拍への上昇調をあらわす）を載せるものがある。それらに語を単位とするアクセント観への胎動のごときものが見てとれることをあらためて指摘したい。

（３）仮名遣書、語学書などにみえる四声観、アクセント観については、以下のことが明らかになった。

A　契沖・宣長の四声観は、「平声」は下降調、「上声」は高平調、「去声」は上昇調とされてきた。これは中世以来の仏家に伝わった四声観を受け継ぐものであるが、それに対して、僧侶でありながら漢学者であった文雄は、江戸時代中期における中国浙江音に基準をもとめ、「平声」は平進調、「上声」は下降調、「去声」は上昇調と捉えた。そのために当時の京畿アクセントで「橋」ハシ●○を、契沖・宣長は「平声」と捉え、文雄は「上声」と捉えた。また「端」ハシ●●を契沖・宣長は「上声」と捉えたのに対して、文雄は「平声」と捉えた。

このような違いは、発端の高さをどのように認識するか（高位に発するとみるか、中位に発するとみるか、はたまた低位に発するとみるか）によるのであり、江戸時代の国学者も漢学者も、その語の発端が、中位を基準として（「平声」）、高いとみるか（「上声」）、低いとみるか（「去声」）を問題にしていたのではなかったか。

近世における四声観、アクセント観は、契沖の仮名遣書の記載をうけて文雄の見解があり、さらにそれに対して宣長が反論するという経過をたどる。これまで我々は、高低二段観にたってこれらを理解しようとしてきたので、宣長についてはアクセントの観察を誤ったという評価さえ聞かれたのであるが、発端の高さをどう捉えたかに注目すると、この問題は氷解する。

B　釈文雄は『和字大観鈔』において「合字四声」ということを説いて、日本語音調の記述を試みた。文雄は中国浙江音によって四声の調価を定めて、それをしかるべき単位（「仮名合字」によってあらわされた単位＝わたくしに「四声単位」とよぶ）にあてはめれば、すべての日本語の音調を記述できると豪語した。その実践例が『和字大観鈔』の末尾に記されている。たしかに文雄のアクセント表記は今日からみれば不完全なものであろうが、彼にしてみれば四声の枠組みで考えたことであるから、それは仕方のないことであった。

（４）故実書、芸能関係伝書に記載された四声観については以下のことが分かった。

近世以降の四声認識の主流となったのは伊勢貞丈流の考えであったとされる。その『安斎随筆』には、時間とともに推移する音調のあり方が左から右への線分によって図示されているが、これを継承したとされる石原正明の『年々随筆（辛酉随筆）』も時間的経過を追っていることは否定できない。また、平声を「もとすゑ同じほど」としながらも、日本語の上昇調も下降調もはっきりしたものではなく、それらが中国語の平声の範疇におさまる、ということが述べられている。

芸能書としては、平曲伝書の一つである『言語国訛』には「平上ノ間ヘ響」というような記載があり、日本語の音調が四声の枠組みにおさまらないことを述べている。また同書には「下ヨリ上ヘ響クヤウニ」として図示されたものも時間的経過を右から左への曲線の幅によって示している点に特徴があるが、これを「上声ノ如ク唱ヘルガ和朝ノ口クセ」と説明しているところからして、やはり日本語の音調が四声の枠組みでは捉えきれなかったことを示している。

また能楽伝書の『五音三曲集』（金春禅竹）には「平上よし」「去入わるし」とあって上昇調や下降調を嫌うことが見て取れる。謡曲伝書の『謳曲英華抄』（二松軒）は契沖『和字正濫鈔』の影響が著しく、平声の文字でも「移る文字」によって上昇することもあり、下降することもあることを述べて、ときには「節に引れて平上去の音の動くは勿論なり」ともいうのであるから、やはり四声の枠組みでは捉えきれないことを音曲の世界においても認識していたことが明らかである。

〈引用文献〉

小西　甚一（1948）『文鏡秘府論考』大八洲出版
金田一春彦（1951）「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版局
金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究　原理と方法』塙書房
頼　　惟勤（1951）「漢音の声明とその声調」『言語研究』17・18 合併号
前田　富祺（1962）「契沖のアクセント観」『文芸研究』40
前田　富祺（1967）「近世における国語アクセント論」『国語学』71

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 上野和昭	４．巻 16
２．論文標題 近世四声論拾遺	５．発行年 2021年
３．雑誌名 論集（アクセント史資料研究会）	６．最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 上野和昭	４．巻 15
２．論文標題 名目鈔声点本研究の経緯と現状	５．発行年 2020年
３．雑誌名 論集（アクセント史資料研究会）	６．最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上野和昭	４．巻 14
２．論文標題 『和字大觀鈔』所載のアクセント表記について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 論集	６．最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 上野和昭	４．巻 187
２．論文標題 本居宣長の四声認識について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国文学研究	６．最初と最後の頁 80-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

アクセント史資料研究会 http://www.f.waseda.jp/uenok/ronshu/ronshu.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関